



Data

監督・脚本：太田隆文
 出演：鈴木杏／板尾創路／田中美里
 ／越後はる香／藤田朋子／
 宝田明／田崎怜弥／草刈麻
 有／富田佳輔／長澤凜／弥
 尋／山下慶／山本淳平／天
 玲美音／亜湖／栩野幸知／
 宮本弘佑／岡村洋一／嵯峨
 崇司／増田将也／本間ひと
 し／真木恵未／遠藤かおる

👁️👁️ みどころ

1989年1月7日の昭和天皇の崩御から始まった“平成の時代”は来年4月には30年間で終わるが、1989年は日本人にとってどんな時代だったの？今やそれを考える企画が花盛りだが、手っ取り早いのは“タイムスリップ”してみることだ。

2010年の今、私はなぜこんな生き方を？もし、20年前の1989年に戻れたら？弟を死なせてしまい、家族をバラバラにしてしまった私の生き方も変えられるのでは・・・？そんな発想で作られた製作費3000万円の市民参加型映画を今こそしっかり確認し、日本人各位の新たな時代への出発点としたい。

もっとも、そのためには本作とは正反対に、現実をしっかりと見つめることが大切だが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 1989年（＝平成元年）とは？それはどんな年？■□■

1989年。日本ではそれはどんな年だったの？平成の時代が天皇陛下の「生前退位」発言をもって、来年4月に30年の経過で終わろうとしている今、1989年1月7日に始まった平成の時代とはどんな時代だったのかが大きな話題となっている。1989年は、そんな“平成のはじまり”としての意味もあるが、それ以上に“バブルの時代”。バブルの最盛期で、「ジャパン・アズ・ナンバー1」と呼ばれた時代だ。東京ではボディコンのファッションが大流行し、「ジュリアナ東京」が大人気。Xmasのシティホテルは1年前から予約でいっぱいだった。そして、アメリカでは？パリでは？

政治面では4月には3%の消費税がスタートし、社会面では手塚治虫、美空ひばり、松田優作等の著名人の死去や、オウム真理教による坂本堤弁護士一家殺害事件、宮崎勤の東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件等が相次いだ。音楽では私の大好きなプリンセス・プリンセスの「Diamonds」が大ヒットした他、小泉今日子、森高千里、浅香唯等が次々と登場した。

かくいう私は当時弁護士として最も忙しい時間を過ごしており、夕方6時以降は毎晩のように「打ち合わせ」と称する親しい依頼者、友人たちとの食事会と、北新地での飲み会が続き、午前0時に自宅に戻ることはまずなかった。そして、日曜・祝日はゴルフ（当時、土曜は休みという感覚は全くなし）で、休みは正月の3日間だけという状況だった。

他方、世界的にはこの1989年は天安門事件（6月4日）や、ベルリンの壁崩壊（11月9日）等、世界が激変した時代として記憶されている、エポックメイキングな時代だ。

■舞台は静岡県の“とある地方都市”、時代は2010年！■

本作の舞台は静岡県の“とある地方都市”。しかし、「ふくろい遠州全国花火名人選抜競技大会」が本作のクライマックスになるうえ、ストーリーの核も毎年7月13日に開催される花火大会をポイントにして作られているから、その舞台が静岡県袋井市であることはすぐにわかる。しかし、本作は静岡県の袋井市、磐田市、森町の地元市民グループにより企画・製作された映画で、製作費の3000万円はすべて市民によるボランティア応援等でまかなわれたそう。もちろん、そんな格安の製作費で完成したのは監督や出演者の協力があつたからだが、いくら市民の協力による映画だからといって、ド素人をたくさん出演させてヘタな演技を披露させるのは如何なもの・・・？本作後半の一部ではそれを痛感したが、それはともかく、本作にみる「ふくろい遠州全国花火名人選抜競技大会」の花火風景は美しい。

私はかつて、松嶋奈々子が長塚京三と共演した『恋と花火と観覧車』（97年）を観て、松嶋奈々子という女優と共にその花火風景の美しさに感動した。また、『火花』（17年）（『シネマ41』62頁）でも静岡県熱海市の花火大会が美しかったが、本作にみる花火風景もそれと同じように美しい。

私は今69歳だが、50年前の出身地の松山にタイムスリップすれば、さまざまな別の人生が考えられるかもしれない。しかし、2010年の今、静岡県のとある地方都市のしがらみ銀行員として（？）働いている吉行みゆき（鈴木杏）が、20年前の1989年の故郷にタイムスリップするという奇跡が起きれば・・・？

■女子高生だった1989年にタイムスリップ！■

2010年の今、そんな“とある地方都市”で父、吉行冬樹（板尾創路）、母、吉行桐子（田中美里）の面倒を見ながら、ひっそり生きているみゆきも、ポチポチ40歳。今日は、

飲んだくれ状況に陥っていた父親の葬儀の日だ。1989年7月13日の花火大会の朝、家族とも弟とも折り合いが悪かった女子高生のみゆき（越後はる香）が家を出ていく時に、「お前なんか死んじやえ！」と言ったばかりに、弟の健太（田崎怜弥）は車に轢かれて死んでしまうことに……。以降、弟の死亡が自分のせいだと思いつめたみゆきは、バブル崩壊による父親の事業の倒産、息子の死亡による母親の病気もあって、大学進学を諦め、高校卒業後すぐに地元の銀行に就職した。しかし、バブルが崩壊する中、社会の状況も家族の状況も一向に改善しないまま、父親の葬儀を迎えたわけだ。

その日、後輩のアヤカ（草刈麻有）らと共に酔っぱらって、「願い事をして全力で走れば、願いが叶う」という言い伝えのある「明日橋（あしたばし）」に出て、「あの頃に戻りたい」と願いながら実際に走ってみると……。あれあれ不思議、たちまちみゆきは女子高生だった1989年の7月12日にタイムスリップすることに！

■□■映像の“再利用”はほどほどに！こりゃ間延びするはず■□■

“タイムスリップもの”はアイデアが勝負。それは“タイムスリップもの”の1つである“タイムマシン”をテーマにした映画でも同じだが、SF研究会に集まる現代風若者たちが、昨日と今日を何度もタイムトリップした本広克行監督の『サマータイムマシン・ブルース』（05年）は面白かった（『シネマ8』150頁）。その最大の要因は、予測のつかない展開の連続にあったが、それに比べると本作のタイムスリップぶりは？

『サマータイムマシン・ブルース』は107分だったが、本作は131分と長尺。その最大の原因は、1989年7月12日にタイムスリップしてきたみゆきたちの行動を描くについて、女子高生のみゆきを中心として描かれた1989年7月12、13日の出来事をそのまま再利用しているためだ。「あの時、もし〇〇していたら……」という“歴史のIf”は、いつの時代でも面白いテーマだが、1989年7月12日と13日の、あのシーン、このシーンについて、その“再利用”を何度も見せられると、いり加減うんざり。これでは間延びするはずだ。映像の“再利用”はほどほどにしなければ……。

それはともかく、そんな作り方の本作では、1989年7月12日にタイムスリップしたみゆきは、アヤカから「先輩。今なら弟さんを助けることができます。未来を変えられるんじゃないですか？」と言われてその気になり、みゆきたちの当時の担任で今でも教師を続けている里美先生（藤田朋子）の協力を得て、さまざまに奮闘を見せるのが本作のメインストーリーになる。

弟の健太が車で撥ねられる日の前日、みゆきが彼氏と約束した“家出”に失敗したのは一体なぜ？また、その日の夕食後にブラリと家を出て行った父親が顔にアザを作って戻ってきたのは一体なぜ？そして、7月13日の朝、みゆきはなぜ弟に対してあんな言葉を吐いてしまったの？もし、タイムスリップしたみゆきたちの力でその言葉をストップさせる

ことができたら・・・？

■□おばさん風になった鈴木杏には少しショックだが・・・■□

岩井俊二が監督・脚本・音楽・製作した『花とアリス』（04年）は、ハナとアリスという2人の美少女を主人公とし、「記憶喪失」をキーワードとした面白い三角関係の物語だった（『シネマ4』326頁）。それから14年。アリスの役を演じた蒼井優はその後、『フラガール』（06年）（『シネマ12』52頁）、『百万円と苦虫女』（08年）（『シネマ20』324頁）をはじめ、『おとうと』（10年）（『シネマ24』105頁）、『東京家族』（12年）（『シネマ30』147頁）、『オーバー・フェンス』（16年）（『シネマ38』66頁）、『彼女がその名を知らない鳥たち』（17年）（『シネマ41』57頁）等で大活躍だが、花の役を演じた鈴木杏の方は『軽蔑』（11年）（『シネマ27』170頁）、『ヒミズ』（11年）（『シネマ28』210頁）、『ヘルター スケルター』（12年）（『シネマ29』未掲載）、『さよなら溪谷』（13年）（『シネマ31』24頁）等に出演しているが、私にはあまりパツとしない感じ・・・？そうやってしまうと失礼だが、1987年生まれの鈴木杏はまだ30代はじめなのに、かなりおばさん風になっていることに少しショック！他方、時代の1コマ1コマを切り取る“ニュース・ステーション”の映像は今を生きる大人は誰でも懐かしいものだが、それを伝えるキャスターが“某人物”そっくりのしゃべり方をしているのも私には本作のマイナス要因だ。

しかし、そんな減点分を差し引いても、本作ラストにみる「ふくろい遠州全国花火名人選抜競技大会」の花火風景は美しい。また、そこにはなぜか2010年のみゆきと共に、浴衣を着て花火大会を見に来ている父親と母親の元気な姿も。さらに、みゆきたちの努力によって無事あの時の交通事故を避けたにもかかわらず、別の誘拐事件とその後の脱出行の中で死んでしまったはずの弟、健太も、今は一人前のカメラマンに成長した姿をそこに見せていたからビックリ！まあ、映画は何でもあり、そしてハッピーエンドは幸せの度合いが大きいほどベター。何やかやと注文の多い映画だが、そう考え、かつバブル時代への懐かしさにポイントを置いて本作は星4つに。

2018（平成30）年8月22日記